

日本バプテスト連盟宣教研究所

宣研ニュースレター

2020.4.16 <HP 限定号外>

〒336-0017 さいたま市南区南浦和1丁目2番4号/TEL 048-813-7567

INDEX

- 【巻頭言】「パンデミック危機」における礼拝と教会を考える 朴思郁 ……1
- 教会の歴史から見る「感染症理解」 朴思郁 ……6
- イースター・メッセージ「復活、茨の冠の勝利」ローマの信徒への手紙8:35-39
朴思郁 ……9
- 【資料】新型コロナウイルス感染の危機の中で共に「祈り」を分かち合うために
日本キリスト教協議会(NCC)神学宣教委員会 ……14

巻頭言

「パンデミック危機」における礼拝と教会を考える

宣教研究所所長 朴 思郁

私たちの日常生活は、すでに二ヶ月以上、新型コロナウイルス感染症（以下、COVID-19）のパンデミックによって、根こそぎ揺さぶられている状況が続いています。毎日更新される世界各地の感染者数、死者数の統計を見ると、世界的に猛威を奮っているウイルスの勢いに圧倒されてしまいます。医療技術を誇っている欧米の先進国でも、

政治家の判断は国民の信頼を得ることが出来ず、多くの人々がコロナウイルスの猛威にさらされ犠牲となっています。そしてこの危機の実体に対して私たちは未だ分からないことが多すぎて、この危機が将来にもたらすだろう苦しみが如何に大きいのかを推測することすら出来ません。状況がこのような不確かであり、流動的であるにもかかわらず

らず、COVID-19のパンデミックは、すでに私たちの生き方に数々の問いかけを投げかけています。今までに経験したことの無い衝撃と圧迫感を感じながら、今までの私たちの思考方式や生き方が揺さぶられています。そして教会と信仰者にとって、思いも寄らない急激な変化は、簡単に受け入れることの出来ない事柄です。

毎週の主の日に教会員みんなが共に集まり礼拝することは、いかなる境遇でも、止めることの出来ない信仰の実践として教えられ、信じてきたはずなのに、突然主の日の礼拝をやめなければならないという現実、どれほど教会員を当惑させる出来事であるかは言うまでもありません。しかし、そのように私たちの慣習と伝統が根本から揺さぶられる状況に直面して、私たちはいまいちど立ち止まって、礼拝と教会に関する根本的な問いかけをし、改めて道を探さなければならない課題を抱くようになりました。それは単に今は例外的状況であるがゆえに、今の状況におけるすべての事柄を例外として取り扱うという意味ではありません。もしかしたら、礼拝をめぐる思いも寄らない非常な状況は、私たちが省察や反省をしないまま、惰性的に受け止めてきたことが溜まりに溜まって引き起こされた結果なのかもしれません。そういう意味で、私たちの教会と教会員は、今の危機的状況を単なる危機として受け止めるのではなく、この危機的状況によってもたらされる様々な意味を丁寧に受け止めながら、個人として、共同体として、改めて振り返ってみるきっかけとして受け止めていけたらと思います。

今は戦争の状況ではありませんが、私たちは、毎日「封鎖」「隔離」など、戦時下で使われそうな言葉を聞かされ

ています。しかし、そのような言葉が飛び交っていることとは異なって、今まで機能してきた、ありとあらゆる種々の境界線、垣根、障壁などが、ほとんど機能不全に陥っている現実を目の当たりにしています。グローバル化した時代に猖獗(しょうけつ)を極めるウイルスは、鉄桶のような国境を自由自在に行き来しています。国境の強制的な封鎖によって感染症の拡大を少し遅らせることはできるかもしれませんが、それ以上の効果があるとは思えません。コロナウイルスは、主に飛沫によって感染が広がっていくため、封鎖や隔離が一定の感染速度を制御することができるかもしれませんが、今後空気感染が可能な異種のウイルスや細菌が出現することも起こりうると予測されます。その際には、人間が集団的に自分たちを守ってくれるという期待のもと築き上げた国境線が、何の意味も持たなくなってしまうでしょう。

また地理的障壁だけではなく、人種的、文化的障壁や垣根もほとんど機能不全に陥りました。COVID-19発生の初期、アメリカやヨーロッパ、またはアフリカでも黄色人種に対する人種差別的態度が強化されていました。中国に対する嫌悪、黄色人種に対する嫌悪、そして西欧的な優越主義や覇権主義が結合して、コロナは自分たちとは関係のない、アジア人に限って当てはまる事柄であるかのように受け止めていたのは、一部の人たちだけではなく、政府の要職にある人たちのインタビューや記事を通して現れています。しかしコロナウイルス感染症の拡散がアメリカやヨーロッパにも広がり始めて、時代遅れの人種主義の障壁または文明の障壁を築き上げて自分たちを防御することも無残にも崩れてしまいました。

また今までは経済的な水準の差異、または階級の差異は、病原菌も超えられない、難攻不落の要塞であるかのように思われました。もちろん新型コロナウイルス感染症のパンデミックがもたらすだろう結果は、おそらく経済的、社会的弱者たちがより多く犠牲と苦しみを受けるに違いないと思われます。しかしCOVID-19の感染拡大は、経済的な水準の障壁、階級の障壁も、無力化していることは確かです。いわゆる第一世界と呼ばれていたアメリカをはじめとするヨーロッパの状況が他のところよりも更に深刻であることが、それを証明していると思われます。気候変化とパンデミックに関して、人間のもつ経済的、政治的、科学的な防衛機制をはるかに凌駕する災いはいつでも起こりうるという科学者たちの警告は、今は自明な事実になりつつあります。ある意味、もしCOVID-19よりさらに強力なウイルスによる感染症が発生すると、人間によってつくられた垣根や境界線は、人間を保護する囲いではなく、かえって人間を拘束する牢屋になってしまうかもしれません。

生態学者たちからは、すでに前兆があり継続的な警告があったにもかかわらず、それに耳を傾けていなかった結果が、今回のCOVID-19の発生となったと言われている。サーズ、エボラ、マーズなど、思いも寄らない感染症の発生が続き、感染症のパンデミックがとてつもない災いを招きかねないという警告も多々あったのです。生態学者たちは、今までに経験したことのない、より破壊的な感染症が全地球的に拡散する可能性があるとあらかじめ警告していました。しかし人間の食欲が自然生態系を搾取し、ウイルスの宿主としてその役割を担ってきた野生生物の生態系を破壊してきた結果、ウイルスは

自らの生存のために、人間を宿主とするようになり始めたと言われています。つまり、ウイルスが人間に向かって線を超えてきたのではなく、むしろ私たち人間が守らなければならない線を超えて、ウイルスを招いてしまったというのが、確かな事実です。そういう意味で、結局他者の不幸を餌食にして自分の幸福を追い求めてきた人間の自己中心的なライフスタイルが招いた結果が、他ならぬパンデミックなのです。今私たちを脅かしているパンデミック危機は、自然の一部である人間が高い垣根や障壁を築き上げて、自然の一部であることを自ら否定して以来予見された結果と言えるのです。自然界で感じる恐れと恐怖は、人々を自己中心的にさせてしまい、より頑固な障壁を設置して自分自身を守ることができると思うようになりました。しかしそれらすべての障壁はCOVID-19の前では無力であり、今後訪れてくるだろう気候変動による災難や他の新種感染症の前では、更に無防備かつ無力になりかねないのです。

ソーシャル・ディスタンスは、私たちが慣れ親しみつつある新しい言葉です。そして、この間、マスクは、品切れのため社会的問題になるほど、今ではなくてはならない必需品となっています。それらのいずれもウイルス感染症の拡散防止のために必要な装置です。ソーシャル・ディスタンスは、意図的に他人との距離と間隔を維持することで、一見自分自身を保護するために他人との距離、関係を広げていく試みとして思われます。しかし実際に実践してみると、ソーシャル・ディスタンスは、自分自身のためのことであると同時に他人のための配慮であることが明らかになります。マスクも同じく、コミュニケーションのために最も大切な

手段である口と鼻を覆うことは、意思疎通を遮断するような行為として見えますが、実際にはマスクは自分を保護すると同時に、他人に対する配慮なのです。ソーシャル・ディスタンスとマスクは、自分を取り囲む垣根や障壁になるのではなく、むしろ「私とあなた」また「私と他者」との関係をより鮮明に表わす象徴となっています。

ソーシャル・ディスタンスとマスクは、ある意味私たちはみんな潜在的被害者にも、潜在的加害者にもなりかねないということが前提とされているのです。私が相手を傷つけることもありうるし、相手が私を傷つけることもありうるということを明らかに示しています。言い換えれば、私たちそれぞれが問題を引き起こさせ、拡散させる人にも、また問題の犠牲者にもなりえますが、同時に私たちが他の人を守ることが出来ますし、今直面している課題を解決できる立場にもなれるということです。強いて言えば、私たちそれぞれは、互いに相手を生かすことも、死なせることもできるということです。今はコロナウイルス感染症の拡散を防げるワクチンもなく、適切な治療剤もありません。今この災難を防ぎ、災難による被害を最小化させる最善の方策は、いわゆるソーシャル・ディスタンスとマスクの着用を含めて、私たち自らが自発的に実践しなければならぬ予防策と行動指針をしっかりと守ることです。医学者たちもそれらが最も強力な感染防止、拡散防止の手段であることを認めています。そういう意味で、私たちそれぞれは、パンデミックによる災難の潜在的犠牲者であると同時に、災難を根本的に克服できる潜在的解決者なのです。

私たちは、今毎日緊張感の漂っている、言ってみれば、「最悪の時」を過ごし

ていると思われるかもしれませんが、逆説的に考えると、自分と他者あるいは世界との関係性を深く考察するという点においては、「最高の時」を過ごしているかもしれません。最も不安な今の状況の中でも、私たちは初めて隣人と他者の大切さを教えられます。私たちは他の人々との繋がりや助け合いによって生きていることをこれまでよりも切実に感じているのです。また私たちそれぞれの生の営みが数え切れないほどの多くの人々との連帯によって成り立っていることを改めて思い知らされているのです。

さらに「隣人」理解においても、多くのことを教えられています。つまり今まで思っていた身近な人々だけではなく、例えば、中国の武漢という、遠くにいる一人の健康状態が、今の自分の生活とどれほど深く関連しているのかをはじめ気付かされる時なのです。ソーシャル・ディスタンスを保って生きていながら、マスクをかけたままスツキリしない挨拶を交わしながら、時には隔離と孤立の状態に置かれて、かえって今までよりも深く「隣人」について省察する機会が与えられています。そこから私たちは、「私たち人類は一つである」という意識を共有することができるようになり、国籍、人種、国境を超えて、互いに連帯し、協力し合って共に生きることの大切さを改めて教えられるのです。

今のパンデミック危機の中で、潜在的犠牲者、または潜在的解決者になれるのは、人間だけではありません。教会の礼拝も同じではないかと思われま。私たちは今、決して意図的な試みではないとしても、礼拝そのものが加害行為になりかねないということを経験しています。しかしそれと同時に真の礼拝は、人々の苦しみと苦難に共に

参与し、問題の解決のために助ける最も積極的な行為にもなりうるということも経験しているのです。前述した話題として、私たちが他の人々に助けられて生かされているという意識がなければ、私たちが他の人々に頼って生きているという意識がなければ、ソーシャル・ディスタンスとマスクは、まさに意思疎通の遮断、孤立の表れ、場合によっては敵対の表れにもなりうるのです。しかし他の人々を尊重する心をもって実践するソーシャル・ディスタンスの維持とマスクの着用は、パンデミック危機を克服し、命を生かして共同体を回復させる大切な道具になるのです。教会と礼拝についても同様に言えると思われます。

言い換えれば、教会の存在と礼拝の実践が、教会の外にいる数え切れないほどの大勢の人々にどれほど深く依存しているのかを認識しなければ、教会の外において生きている多くの人々の生の営みを心から尊重しなければ、教会の礼拝は、自画自賛に過ぎないし、他者に対する加害行為にもなりかねないのです。未曾有のパンデミック危機という時代を生きている、無数の「隣人たち」と交わりと連帯を深めていく、真の礼拝のあり方を模索していけると願います。

(ばくさうく／宣教研究所所長、
西川口キリスト教会協力牧師)

教会の歴史から見る「感染症理解」

朴 思郁

教会の歴史において感染症は、当代の宗教がもつ認識水準を測ることができる出来事でした。感染症そのものに対する対応より、感染症の意味を宗教的に解釈しようという試みは、ほとんどが、嫌悪と排除の論理に基づいています。排除とは、存在していることを存在していないかのように認識することであって、嫌悪とは、存在していないかのように排除されていた存在が現れたときの反応です。今回の新型コロナウイルスに対する理解を考察する際に、最も気をつけなければならないのは、中世教会が犯したように、依然として自然災害を「神的行為」として理解し、その原因を見つけ出し、その対象を他者化しようとする試みです。ときには、そのような動きは一瞬に狂気になっていくこともあるからです。

人類歴史の発展過程において一つの新しい文明が形成されていくためには、多くの多様な要素が組み合わせられ、はじめて可能となります。主導する勢力は存在しても、既存の限界を超えて新しい流れを生成するためには、純粹または純血主義を主張することだけでは十分ではありません。文明の基礎がなかったヨーロッパ大陸でキリスト教を中心としたヨーロッパを築き上げようとした中世の世界の試みは、キリスト教という新たな思想を取り入れるために多様な伝統を受容しました。一次的には、異民族と彼らの土着信仰をキリスト教化する形で多様性を受け入れ

ました。そのような文脈の中で、ヨーロッパにおける中世キリスト教の形成において、ユダヤ人たちは目立つほどの差別を受けることなく共存することができました。

そのような土壌をもつ中世ヨーロッパで、ユダヤ人に対する差別と他者化は、一つの特定の出来事によって形成されるより一連の出来事の中で形成されました。それらの要素には、人間自らが招いた「人災」と、人間の意志と関係のない「自然災害」も含まれています。ヨーロッパの教会が反ユダヤ的思考を具体的に表すようになるきっかけは十字軍でした。十字軍の遠征は異教徒に奪われた聖地を奪還するというのが目的でしたが、イエスの十字架の出来事を招いた究極的な原因としてユダヤ人に対する反感に繋がってしまいました。第3次十字軍の遠征を前にして、1189年プラントジネット王朝のイングランド王リチャード1世の戴冠式の際に、突如としてロンドンとヨークでユダヤ人に対する虐殺事件が発生しました。ユダヤ人たちが王を殺害しようとしているというデマが無分別に広まっていて、それに煽られた暴徒たちがユダヤ人を虐殺する事件が起きたのです。ユダヤ人の大半の家が焼かれ、多くのユダヤ人が殺された、ユダヤ人の財産はイングランド王のものとなされた「ボグロム(集団的虐殺)」は、ヨーロッパで現れた大衆による反ユダヤ主義の始まりでした。当時のカトリック

教会は、冷静を装いながら、曖昧模糊とした態度をとりました。13世紀の前半にユダヤ人たちを暴徒から保護するという名目で「ゲットー(ghetto)」と呼ばれるユダヤ人居住地が登場しました。分離して保護するということは、ある意味「制度的な差別」を意味します。北米にも見られる「インディアン・リザーベーション」(インディアン居留地)のような措置として、13世紀の前半期における中世の弾圧社会の形成を垣間見ることができるとのことです。

その弾圧社会に溜まっていた悪感情が噴出したのは、ヨーロッパにおける前代未聞の災害である黒死病でした。1300年代の半ばにヨーロッパ大陸に上陸して以来、たった数ヶ月の間にヨーロッパの人口のうち3分の1が死亡したと知られている黒死病は、まさに恐怖そのものでした。そして黒死病は、中世の意識水準を示す出来事でした。つまり中世の人々は感染症に対して多様な反応を示しました。たとえば黒死病は、墮落したこの世に対する「神の審判」として受け止めていた人々がいました。彼らは感染症に対する対応として、自分を鞭打ちながら行列を作る

「鞭打ち苦行団」のような極端な「懺悔苦行」の方式を選び取りました。

一方、それとは異なる、ルネサンス人文主義の影響を受けて、宗教の中で客体化されていた人間に対する関心を深める動きもありました。後者の反応は、中世の感染症に対する迷信的対応を超えて、体系的な医学を発展させる起爆剤になりました。それが「黒死病は近代の扉を開いた歴史的事件」とも言われる理由です。反面、前者の流れのように、感染症を「神の怒り」として解釈した人たちは、極端な禁欲を感染症の解決策の一つとして提示しました。しかし自然災害を「神的行為」

と結びつけて「宗教的省察」を解決策として促すことは決して健全な解決策になりませんでした。今日の医学的見地から見ると、感染症に対する最優先事項は、個人と共同体の衛生を改善することですが、自ら鞭打ちながら肉体を虐待する非衛生的苦行が感染症を防止できなかったことは言うまでもありません。宗教的恐怖が無分別的狂気に一変するのは、たった一瞬なのです。

「フォース・マジュール」(Force Majeure)という古くから取引通念上認められてきた英文契約書の必修条項として「不可抗力」を意味するフランス語がありますが、それは「神的行為」(acts of God)とも置き換えられます。「神的行為」とは、言い換えれば「神の審判」でした。枢機卿と司教たちを含む聖職者たちも感染症の攻撃から逃れられないという現実には当代の教会の権威が崩れていく原因でもありました。教会は宗教的苦行が黒死病という「禍」に打ち勝つことができなくなって、その原因をほかのところから見つけようとし始めました。そしてその悪の根源として、他ならぬユダヤ人たちがスケープゴート(いけにえ)になりました。中世の人々に比べて、比較的衛生観念が進んでいたユダヤ人たちの居留地である「ゲットー」地域は、他の地域より黒死病の被害が少なかったです。それ故に、被害者のキリスト教徒と加害者のユダヤ人という構図が成り立ったのは、ある意味ごく自然な流れでした。その結果、ヨーロッパ社会におけるユダヤ人に対する差別と嫌悪は、收拾がつかなくなり拡大再生産されていきました。そして15世紀の半ばからは、ヨーロッパ大陸からユダヤ人たちを追放する措置にまで拡大しました。ヨーロッパのキリスト教は、他者に対する憐憫や包容より、排除と抑

圧を選び取りました。強いて言えば、それを選択したのではなく、それ以外の選択肢を持っていなかったと言えるのです。

未曾有の「パンデミック危機」に直面している私たちは、今一度、立ち止まって、教会の歴史を振り返ってみることが必要であると思います。批判的
自己省察を通して、キリスト教が歴史上で犯してきた「排除」と「嫌悪」という過ちに再び陥らずに、今の時を生き抜くために求められる信仰者としての認識と姿勢を改めて整えることができると願います。

(ぱくさうく／宣教研究所所長、
西川口キリスト教会協力牧師)

イースター・メッセージ

「復活、茨の冠の勝利」

ローマの信徒への手紙8:35-39

朴 思郁

「だれが、キリストの愛からわたしたちを引き離すことができましょう。艱難か。苦しみか。迫害か。飢えか。裸か。危険か。剣か。「わたしたちは、あなたのために／一日中死にさらされ、／屠られる羊のように見られている」と書いてあるとおりです。しかし、これらすべてのことにおいて、わたしたちは、わたしたちを愛してくださる方によって輝かしい勝利を収めています。わたしは確信しています。死も、命も、天使も、支配するものも、現在のものも、未来のものも、力あるものも、高い所にいるものも、低い所にいるものも、他のどんな被造物も、わたしたちの主キリスト・イエスによって示された神の愛から、わたしたちを引き離すことはできないのです。」

私たちは、新型コロナウイルス感染症による未曾有の世界的な危機に直面しています。

先日は、首都圏を中心として「緊急事態宣言」が発令されましたが、ゴールデンウィーク明けまでの一ヶ月の間、私たちはそれぞれの命、それぞれの生活をしっかり守ることが、何よりも最優先の課題であることを覚えながら、手洗いを徹底すること、社会的距離を保つこと、そして免疫力を高めるため

に十分な睡眠や運動、休息を取ることなど、「自分で自分を守る」ということに専念していきたいと思います。

今の時代と似ている状況をたどって世界史をさかのぼると、1918年に「スペイン風邪」と呼ばれるパンデミック(全世界的流行)が発生して、1918年1月から1920年12月まで世界中で5億人が感染したと言われています。その数は当時の世界人口の4分の1程度に当たりますが、その感染拡大はまさに全世界的規模で、太平洋の孤島や北極圏の人々も含まれています。当時の死者数は、1700万人から5000万人とも、または1億人に達した可能性も指摘されるなど、人類史上最悪の感染症の一つであると言われています。

今回の新型コロナウイルス感染症は、「1918年パンデミック」から100年ぶりの世界的な感染症であると言われています。

私たちは、連日コロナウイルスという言葉を目にしています。そもそもコロナは、ラテン語の王冠を意味しますが、一般に太陽の周りの光の輪に由来していると言われます。

その理由は、顕微鏡で見るとウイルスには大きな球状の表面突起があり、王冠や太陽コロナがイメージされたとい

うことから「コロナウイルス」と呼ばれるようになりました。

コロナウイルスによる感染症は、今回だけではなく、2003年にサーズ、2015年にマーズが発生したことがあります。

COVID-19と呼ばれる、今回のコロナウイルスは中国の武漢より広がり、その根源は武漢にある生鮮市場の蛇やコウモリであるなど、未だに感染源がわかってはいませんが、3月26日にイギリスの科学専門誌「ネイチャー」に、ウロコを持つ哺乳類の一種である「鱗甲目」(センザンコウ)から、新型コロナウイルスと極めて類似したウイルスを発見したという内容の論文が掲載され、注目を浴びているそうです。「センザンコウ」は英語、スペイン語ともに「Pangolin」と言いますが、中国で肉は食用、うろこは伝統薬の材料として使用され、密売の対象になり、絶滅の危機に瀕していると言われていました。2003年のサーズや2012年のマーズ、そしてCOVID-19のいずれにせよ、野生生物の消費は絶滅危惧種や密売の問題、人獣共通感染症のリスクがあり今回のような悲劇を生みかねません。新型コロナウイルス感染症の拡大が早く収束することを心から願います。

さて、イースターは、ある意味、「コロナ」との関連があります。つまり「コロナ」、すなわち「王冠」と象徴される権力との関係を意味します。マタイによる福音書27:27-31には、「それから、総督の兵士たちは、イエスを総督官邸に連れて行き、部隊の全員をイエスの周りに集めた。そして、イエスの着ている物をはぎ取り、赤い外套を着せ、茨で冠を編んで頭に載せ、また、右手に葦の棒を持たせて、その前にひざまずき、『ユダヤ人の王、万歳』と言って、侮辱した。また、唾を

吐きかけ、葦の棒を取り上げて頭をたたき続けた。このようにイエスを侮辱したあげく、外套を脱がせて元の服を着せ、十字架につけるために引いて行った。」と書いてあります。

イエス様は、「コロナ」をかぶっている権力者たちによって、「茨の冠」をかぶせられ、さらに唾を吐きかけられたり、頭を叩かれたりする侮辱を受けているのです。ある意味、イエスの生涯は、コロナとの緊張関係の連続と言えると思います。言い換えれば、イエスは、「コロナ」によって苦しみを受け続けられたと言えましょう。

聖書の物語を思い出せば、イエスは生まれてから、この世の「コロナ」をかぶっている人たちによって、命が脅かされて、エジプトに避難せざるを得ませんでした。そして、公生涯を始めてからは、宗教的「コロナ」をかぶっている祭司長たちや宗教権力者たちによる嫉妬と殺害の陰謀によって苦しみを受けられました。そして、当時の「コロナ」たちの結託によって、ついにイエスは十字架に磔(はりつけ)になったのです。

十字架につけられたイエスの頭には、権力者たちの「コロナ」ではなく、「茨の冠」がかぶせられていました。芸術的な形や模様もなく、輝かしい権威の栄光もなく、イエスにかぶせられ血まみれになった「茨の冠」は、残酷な苦しみの象徴となりました。



ヒエロニムス・ボスが書いた『エッ
ケ・ホモ(この人を見よ)』という絵が
あります。

そこには、頭に茨の冠がかぶせられた
裸のイエスが描かれています。その絵
の中にある、大勢の群衆があざけり笑
っているイエスは、到底メシアとは思
えない、あまりにも見窄らしい姿なの
です。

そして結局「茨の冠」のイエスは
「コロナ」の人たちによって、無残に
も十字架に磔(はりつけ)になって処刑
されました。「茨の冠」のイエスは、
「コロナ」をかぶった人たちによって、
完全に破壊されたのです。そして、最
も残酷なイエスの十字架の死は、イエ
スに限らずに、イエスに従っていた弟
子たちやイエスを愛し、親しんでいた
人たちも、全て破綻してしまう、悲し

い結末を迎えることになりました。

それは、確かに「コロナ」をかぶっ
ている高慢な権力者たちの勝利でした。
イエスのご遺体は、直ちにお墓に運ば
れ、そのお墓は固く封じられてしま
います。人類の希望の歴史は、そこで止
まってしまいました。しかし、それは
たった三日だけでした。

茨の冠をかぶせられたイエスが、固く
封じられているお墓の扉を一気に開か
れたのです。

誰もが想像することが出来ない、真似
することすらできない、死を克服する
出来事を、主イエスは三日目の復活に
よって成し遂げられたのです。いか
にも威風堂々たるこの世の「コロナ」
をかぶった権力者たちが、「茨の冠」
をかぶられたイエスによって、完全
に敗北してしまう出来事が起きたの
です。死の勢いを征服し、死に完全
に打ち勝った、「茨の冠」をかぶら
れた方に果たして誰が立ち向かう
ことが出来ましようか。

イースターは、「コロナ」をかぶ
っている権力者たちと「茨の冠」をか
ぶっている方々の間の戦いに終止符
を打つ日なのです。それは、他なら
ぬ「茨の冠の勝利」でした。それ
だけではなく「茨の冠」をかぶ
っている方々に従っていた人たちの
勝利でもあります。

それは「茨の冠」から流れ出て、
十字架の下に滴る血潮によって得
られた勝利なのです。

その勝利について、使徒パウロは
次のように言います。「だれが、キ
リストの愛からわたしたちを引き離
すことができましょう。艱難か。苦
しみか。迫害か。飢えか。裸か。危
険か。剣か。

「わたしたちは、あなたのために／
一日中死にさらされ、／屠られる羊
のように見られている」と書いてあ
るとおりです。しかし、これらすべ
てのこと

において、わたしたちは、わたしたちを愛してくださる方によって輝かしい勝利を収めています。」（ローマ8:35-37）

復活の信仰に生きるということは、ただ単に将来の死後の事柄ではありません。

それは他ならぬ、「今、この状況の中で、いかに生きるか」という事柄なのです。

たとえ「わたしたちは、あなたのために／一日中死にさらされ、／屠られる羊のように見られている」という不安と恐怖心にさらされていても、その状況の中で耐えることができるのは、「茨の冠」をかぶられたまま、この世のありとあらゆる「コロナ」をかぶった権力に対して、復活の力によって、見事に打ち勝って勝利を収められた主イエスが、今も私たちと伴ってくださるという確信があるからこそできるのです。

ダビデは、すでに詩編23編で、その復活の信仰に生きる証しをしています。

「死の陰の谷を行くときも／わたしは災いを恐れぬ。あなたがわたしと共にいてくださる。」（詩編23:4a）

毎日、感染者の数が更新され、しかも感染者の感染経路が不明であることを耳にすると、疑心暗鬼にさいなまれ、周囲に対する警戒心が増しているこの頃を過ごしています。

もしかしたら自分もいつの間にか感染しているかもしれないという不安もあれば、感染することを恐れて周りの人々を疑ってしまうことも起こりうる日々を過ごしています。

このような心の落ち着かない時にこそ、今も「茨の冠」の主イエスが、私たちと共に歩んでくださるということを思

い起こしていきたいと思います。

そして今、自分は何も出来ないという無力感に陥ることではなく、私たちがしっかりと自分と自分の生活を守ること、それこそが、今私たちがコロナウイルス感染症と戦っていることであることを覚えることが大切であると思います。

とりわけ、このような時に信仰者として最も気をつけなければならないのは、今回の感染症のような世界的な危機に安易に何らかの意味付けをしようとすることです。

「人間の傲慢な罪に対する神の天罰」とか、「宣教師を迫害した中国に対する警告」とか、いろいろ意味を加えようとしたくなるのが、宗教のもつ誘惑であり危険性です。

フランスの作家、カミュが書いた『ペスト』に登場する医師リウーの言葉は示唆に富んでいます。

「この世の秩序が死の掟に支配されている以上は、おそらく神にとって、人々が自分を信じてくれないほうがいかもしれないんです。そうしてあらんかぎりの力で死と戦ったほうがいいんです、神が黙している天上の世界に眼を向けたりしないで」

リウー医師は、自分も感染するかもしれないという恐れを抱えながら、懸命に大勢の感染者の治療に専念している理由を尋ねられた時に、そのように答えたのです。

彼の言葉は、神を否定するのではなく、むしろこの現実において、一生懸命に自分ができる限りのことを尽くすことが、神の御心に適ったことであるという肯定の言葉でした。

カミュと同じく、フランスの哲学者であるサルトルは、「この世に一人でも不幸な人がいるのであれば、自分もそれに対する責任がある」と言いました。

カミュとサルトル、それぞれの言葉を合わせると、今、私たちがなすべきことは、世界的な危機に直面している今、私たちは、みんな自分の責任として受け止めて、どのように協力し、乗り越えられるだろうかという連帯意識を共有することです。

そして、こういう事態になったことを誰かのせいにするのではなく、互いに助け合い、励まし合いながら、今の大変な状況乗り越えていくことです。特に、私たちは今回の全世界的な感染症を通して、今まで思っていなかった数々のことを教えられました。

その中で最も大切なのは、「私たち人類は一つである」ということです。国籍、人種、国境を超えて、互いに連帯し、協力し合って共に生きることの大切さを改めて教えられます。

それが「茨の冠」をかぶられ、ありとあらゆる「コロナ」に輝かしい勝利を収められた、復活の主イエスが望んでおられる世界であると思います。

感染症の拡大の中、一人でも多くの人々が命の危険にさらされることがありませんように祈りつつ、イースターを過ごしたいと思います。

お祈りします。

主なる神様、今、私たちは、新型コロナウイルス感染症の拡大という未曾有の世界的な危機に直面して、イースターを迎えております。

感染することの恐れ、すでに感染者かもしれないという不安を抱えて、心の落ち着かない毎日を過ごしている現実の中でも、「茨の冠」の主イエスが、私たちの弱さ、恐れ、不安の只中に共におられることを覚え、大変励まされています。願わくは、感染症が拡大していく中、私たち一人ひとりが、懸命

に自分を守ることに専念して、健康が守られますように、助け導いてください。

神様、どうか、何よりも今感染症のために、命を脅かされている方々の上に臨んでいてくださいますように。適切な治療が行われ、命が助かりますように助けてください。

中には、感染症のために亡くなられた方々、そして最後を看取ることが出来ないまま、お別れをせざるを得なかったご家族の方々もおられると思います。主よ、その方々を哀れみ、慰めてくださいますように。また現場で治療にあたっている医療機関の方々の健康をも守ってくださいますように。

今回の世界的な感染症を通して、私たちは「世界は一つである」ということを改めて教えられました。私たちが

「隣人を自分のように愛しなさい」という主の言葉を、身近な人だけではなく、遠くにいる隣人までに広げていくことが出来ますように。何よりも、一日も早く、新型コロナウイルス感染症が終息しますように祈ります。

「コロナ」に打ち勝って、輝かしい勝利を収められた「茨の冠」の復活の主イエスの名によって祈ります。アーメン。

(ぱくさうく／宣教研究所所長、
西川ロキリスト教会協力牧師)

**【資料】新型コロナウイルス感染の危機の中で共に「祈り」を分かち合うために
日本キリスト教協議会（NCC）神学宣教委員会**

今、私たちは、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の世界的な感染拡大という危機に直面しています。私たちはこの未知の脅威に恐れ、戸惑い、不安な日々を過ごしています。そして、このような状況の中で私たちは日々選り取りを迫られながら、ウイルスに感染する恐怖、また自らがすでに感染者かもしれないという不安にとらわれています。そして、自分を守ろうとする思いから隣人を警戒するあまり排除し、また、禍（わざわい）の原因を押し付け、差別の対象とってしまう愚かさにとらわれています。そのような人間の弱さと罪深さのゆえに、今、新型コロナウイルス感染の止まないこの世界において疑心暗鬼に苛（さいな）まれ様々な差別や暴力が起こっています。

主イエスは「あなたがたは地の塩であり、世の光である」（参照、マタイ5:13-16）と語りかけておられます。私たちキリスト者はこの言葉に答え、「今」この時も、世に在って地の塩、世の光として執り成し祈り、福音を語り、他者と共に生きる者として歩み続けたいと切に願っています。

神に呼び集められたものとして、私たちキリスト者は信仰共同体を形成し、共に集い、礼拝を捧げ、礼典にあずかり、主の食卓を分かち合うことを大切にしてきました。そのような歩みをしてきた私たちが新型コロナウイルス感染拡大の中、「集まる」こと、また互いに手を取り挨拶を交わし合うことが、かえって隣人と自分の「いのち」を脅かすことにもなりかねない現実と向き合っています。

今日の危機的状況の中、キリスト教界には新型コロナウイルス感染症のクラスター（感染集団）の発生を憂い、細心の注意を払いながら集まり、礼拝することを選んだ群れがあります。また、「いのち」への脅威を避けるため集まることを断念した群れがあります。それぞれの決断の背景に苦悩の祈りがあります。それぞれの教会が祈りの中で選り取りをしています。その決断についてなお迷い、自問する群れもあるでしょう。だから今、私たちは安易に唯一の「答え」を掲げることがを慎みます。安易に「答え」を掲げるとは、他者を裁くことにつながります。今この現実の中で、私たちは裁きではなく慰めを祈り、なおも主の福音を宣教する者でありたいと願います。

神は被造世界とそこに生きるいのちに仕える務めを人間に託されました。しかし私たち人類はこれまで、経済優先のむさぼりにより自然資源を搾取し、地球環境を破壊して来ました。しかし私たちは神の創造の御業であり、いのちの基盤となる生態系が破壊されていくことに対して鈍感かつ無自覚であったため、十分に抗えず、むしろ同調したり傍観したりして来たのです。このことを今、いのちの脅威に直面し、また、その中ですでに失われた多くの人々の尊いいのちを悼みながら、私たちは主の十字架の御前で悔い改めます。

しかしなおも、そこから私たちは、被造世界の中で神の和解と平和の御旨を託された「神のかたち」を刻まれて遣わされ、生かされている者として互いに慈しみ、共に生きるものとして、他者と共に歩む道へと踏み出すように、復活の主イエス・キリストによって励まされ、招かれていることを信じます。そして、物理的な交わり（コイノニア）を大切にしつつも、たとえ「集まる」道が遮られても、イエスの「神は霊で

ある。だから、神を礼拝する者は、霊と真理をもって礼拝しなければならない」（ヨハネ4：24）との言葉に込め、霊的な交わり（コイノニア）を形成し、霊と誠をもって私たちは互いに「結ばれている」ことを思い起こします。

今、この時、復活の主が「あなたがたに平和があるように」（ヨハネ20：19）と呼び掛けてくださることを信じる私たちは教会と社会への「奉仕」（ディアコニア）とは「何か」を、それぞれの置かれた状況の中で祈り求め、愛と知恵ある者として「奉仕」を担い、希望をもって行う者でありたいと願うのです。そして、これからも、また今こそイエス・キリストの慰めと希望の言葉を「宣教」する教会（エクレスシア）でありたいと祈り求めるのです。

－祈りの言葉－

また、群衆が飼い主のいない羊のように弱り果て、打ちひしがれているのを見て、深く憐れまれた。（マタイ9章36節）

主よ、あなたは全ての被造物を支え導かれる創造主であり、その主権を持って歴史を導き、私たちと共に歩んでくださることを信じます。

主よ、今、私たちは「新型コロナウイルス感染症（COVID-19）」と向き合い、不安と戸惑いの中を歩んでいます。私たちはコロナウイルスが世界的に猛威を振るう中、感染し、苦しんでいる方々の上にあなたの癒しを祈ります。そして、感染症によって命を失った方々とご家族や知人、とりわけ弔いの機会さえ得られなかった方々への主の慰めを祈ります。また、すでに罹患した人々の治療のために、自らを休める時間もままならず医療に従事する人々の健康を主よ、お支えください。

主よ、コロナウイルス感染症の见えない脅威と向き合いながら、心の落ち着かない日々を過ごしているわたしたちを、憐れみをもって導いてください。感染することへの恐れ、すでに感染しているかもしれないという不安の中にある私たちが、よりよい選び取りをしながら日々の生活を送ることができるよう、祈ります。わたしたちが不安と恐れの中にあっても、隣人と他者への配慮を忘れずに、執りなし祈るものとしてください

主よ、不安に覆われる中、世の力を持つ者、為政者たち、また、経済に関わる者たちが何よりもまずいのちを差別の隔てなく大切に判断を行うことができますように。そのために私たちに語るべき言葉と行動する勇気をお与えください。そして、私たちの社会と世界がこの危機を乗り越えるために互いに協働することが求められる時、どうか私たちの教会が豊かに用いられる道をお示しください。

あなたに呼び集められた教会（エクレスシア）は、集いと交わり（コイノニア）を大切にしてきました。しかし、いま、コロナウイルス感染症の状況の中、迷いと痛みを覚えながら集うことを中断する判断をした群れがあれば、集い続けることを選択した群れもあります。正しい答えの見えない中、私たちが互いの選び取りを尊重し、裁き合うことがありませんように。そして、物理的な距離を超えて、教会の信仰の友、そして周りの隣人の命と平安のために神に仕え、イエス・キリストにある慰めを伝えていく教会として歩ませてくださいますように。

復活の命の主、イエス・キリストの御名によって、祈ります。アーメン

